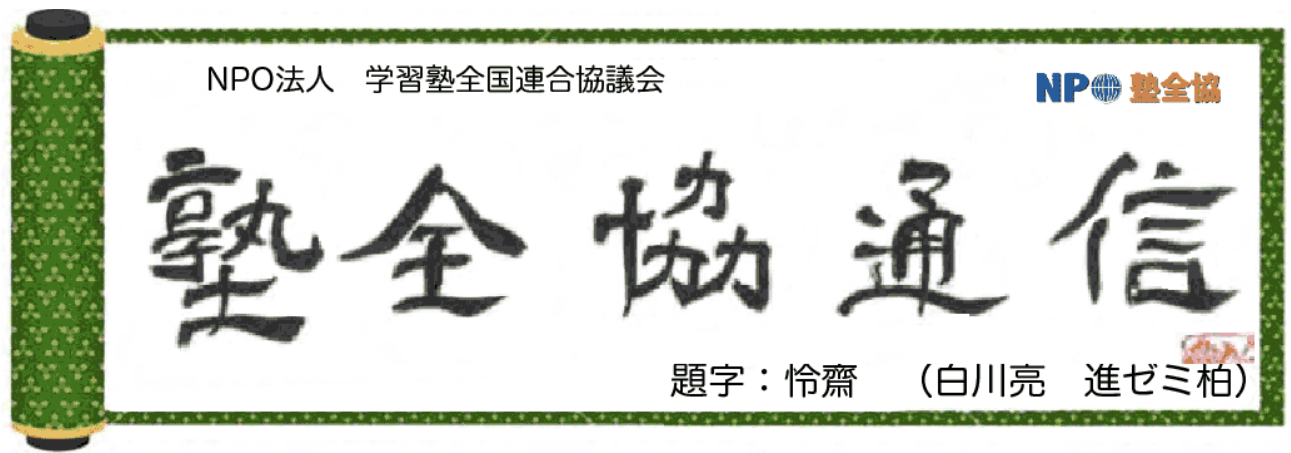


2024年12月



## 第48回 NPO 塾全協全国研修大会

主催：NPO 塾全協西日本ブロック

日時：2024年11月4日（月・祝）14:80～18:00

会場：姫路市民会館5階 第一会議室

テーマ：生成AIを教育に活かす

参加者：約30名

講師：福知山公立大学副学長 西田豊明氏



AI、情報処理分野の日本を代表する学者。1973年京都大学工学部情報工学科に入学し、その在籍中からAIの研究を始めた。知的活動を助けてくれるAIをつくりたい、という出発点から、言語理解、定性推論、知識共有、会話情報学と少しずつ研究の焦点を変えていき、現在は、人と人ばかりでなく人とAIの円滑なコミュニ

ケーションを可能にするテクノロジーの研究に取り組んでいる。研究歴は日本屈指。米国スタンフォード大学などが選ぶ世界トップ2%の科学者リストに入っており、これまでに国際学会から10件以上の表彰を受けている。最近はAIについて分かりやすく解説する講演が評判となり、全国を飛び回る多忙な毎日を送っている。

所属学会…人工知能学会、AAAI、IEEE、情報処理学会、電子情報通信学会

「AIの善し悪しを言う前に使い倒そう。」「させられる勉強はちっとも面白くないが、自分から



するのは楽しい。」「コンピュータは指数関数的に発達する。」に始まり、チャット GPT の使い方の説明が色々為されました。(詳しい講演内容の書き起こしは、来年発行の塾全協新聞に掲載予定です。)

スマホ・タブレットを使用したワークショップも予定されていましたが。質疑応答が予想外に多く、残念ながら時間不足で出来ませんでした。しかし、これも関心の高さを示しています。

## 大会宣言



(左 大会宣言を読みあげる寺田圭吾大会実行委員長)

依然として続く少子高齢化により、人口減少が進むこれからの日本において、科学技術、特に生成 AI の活用は、不可欠になってくるでしょう。デジタル革命が加速する社会において、子どもたちに教える内容は変化しつつあり、その方法も変革の途上にあります。どのような社会環境においても、それに対応できる力を養成していくという根本は変わらない一方、その方法は多様化しています。教育において、生成 AI はその利用により、さまざまな可能性を探ることができます。私たちの教育方法は劇的に変わり、未来の学びのあり方を新たに築くことが期待されています。

しかしながら、単なる知識伝達では、人間は AI に太刀打ちできません。そのため、生成 AI は我々教師の存在を脅かす可能性もあります。したがって、民間においては真の教育者のみが「塾の先生」として生き残る時代が到来することを覚悟しなければなりません。人としてしか成し得ない、子どもたちとのふれあい、学ぶ意欲の喚起、感化し啓蒙することができる人間になることが、教師には求められます。

本日の大会を通じて、生成 AI の教育への活用について多くの知見を共有することができました。我々が試行錯誤を重ねながら、子どもたちのため、そして、その結果として、社会のために、生成 AI をより有用に活用していく方法を模索し確立していく必要があります。

私たち NPO 塾全協は、今大会のように、自分たちの指導力をつけるため、見識を広げるため、情報を得るため、全国の仲間と共に研修や活動を続けてきました。これからも、自己研鑽を積み、次代を担う子ども達のために全力を注いで取り組むことを決意し大会宣言と致します。

2024年11月4日 第48回 NPO 塾全協全国研修大会 大会実行委員長 寺田圭吾



研修大会の会場は姫路城のすぐそば。ここまで来たなら行くっきゃないと午前中に訪れました。予想していたとおり、今まで見た城の中では一番美しい城でした。「暴れん坊将軍」良く出て来る「江戸城」の画像は実はこの姫路城だと知ってビックリでした。(中

## 小説「多奈川線」 発刊のお知らせ

—現在と古代の岬町を舞台に少年の異性への想いと成長を描く—

大阪府岬町 地球塾 中村 勲

(はじめに)

60歳になったころ、深日港（ふけこう）の釣道具店の大将に「このままやったら岬町あかで」と言われたことが忘れられない。食堂、土産物屋、飲み屋、喫茶店や旅館など軒を連ねて賑わったこの深日港界限も淡路島や四国への航路が廃止され、ほとんどが空地になった。現在、その一角に小さな喫茶店が営業している。建て替えて依然の面影はない。まだ、入ったことはない。そこが「喫茶いずみ」である。小説でイタリア語の「フォンターナ」の名で登場する以前の「喫茶いずみ」はこの地には珍しく都会的な雰囲気が漂っていた。そこでは、観光客に交じり地元の若者も楽しいひと時を過ごしていた。また、政治、公害、教育、まちづくりなどについて静かに議論できる場でもあった。小説では、塾の村藤先生と学校の大北先生がそこで語り合い、親交を深めていく。



人生を振り返り、突き動かされるように「小説」を構想するようになった。このまま、さびれていく町を放っておけない。ただそれだけだ。でも、それは大それたことだ。文才もないのに。しかし、そんなことで二の足を踏んでる場合ではない。大切なことは、突き動かされたと感じた者が行動に踏み切り、先陣を切ることだ。そうして、自分に言い聞かせるようにペンを取った。岬町を舞台にした小説は今までにない。最初と最後の場面はすぐ書き上げ、ストーリーの骨格もできあがり、1年後には全体の6割ほど書き上げていた。ところが、人生は思うようには進まない。60代は私個人、家庭に時間をかけなければならなかった。それでも、病院の病床で後半部の古代での場面やストーリーを具体化することができた。そして、70歳になる直前によく書き上げることになる。もっと早く仕上げる予定だったが、後悔はしていない。この10年で体験した貴重な出来事も加えている。今年になってから推敲を重ね、なんとか出版にたどりつくことができた。

(発刊にあたり)

小説では、塾の先生と学校の先生の交流も脇役ながら主役の顔をして同時進行していきます。「塾全協」は「全塾協」として登場しています。どうか、興味のある方はご購入ください。

岬町の人口は現在約 14400 人で、ピーク時（1978 年）よりも 9000 人以上減少しています。その上、昨年（2023 年）の秋には多奈川線の減便（昼間は 1 時間 1 本の運行になる）が実施され、岬町、特に多奈川線沿線の住民にとっては、気が滅入る思いです。しかし、一方で「岬町を何とかしなければ」という声があちこちから聞こえてきているのも事実です。小説「多奈川線」はそのような声に突き動かされて誕生しました。

小説「多奈川線」では、現在と古代の岬町を舞台に、少年の異性への想いと成長を軸に「人と町の再生」を描きました。人が負の体験から立ち直る過程は、町が負のスパイラルを断ち新たに生まれ変わる過程とよく似ています。岬町の自然や文化、そして歴史にくるまれて生きる少年少女たちと、彼らを温かく見守る大人、特に塾の先生と学校の先生の生き方を、地元の方言を使い、平易な文章で表現しました。ぜひ読んでもらいたいと思います。

「千歳橋を渡りながら、夕日を浴びてほんのり赤くなった飯盛山の方を見ると、多奈川線が国玉神社の森に吸い込まれていった」

「夢の中にも時空を超えた人生があって、夢の中でも人は成長できるということかな」

「生徒は『先生、わかった』『数学って面白いね』と言ってくれたのよ」

「南は本当に大物だ。感情を高ぶらせても話がぶれない。僕はそんな男と対抗している」

「命をかけて樁を救おうとしたあの日。僕にとっては特別な一日だった」

（小説「多奈川線」より）

\*この本は 2 月 17 日以降 風詠社より発行されます。

興味ある方は地球塾 中村勲先生までお問い合わせください。電話番号とメルアドは以下のとおりです。

072-492-2098